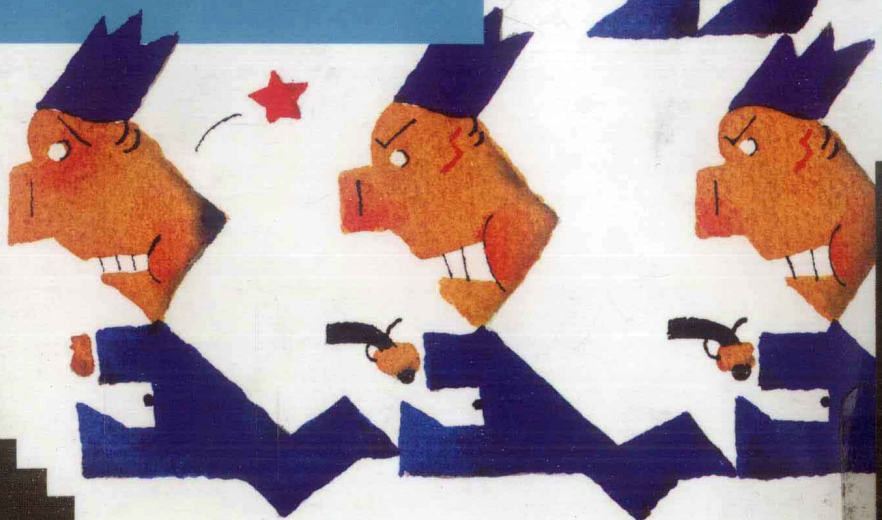


鞆の中から 出てきた話

なだいなだ



なだいなだ

鞆の中から 出てきた話



鞆かばんの中なかから出でてきた話はなし

定価 九五〇円

一九八一年四月五日 第一刷
一九八一年五月三十日 第二刷

著 者 なだいなだ

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪府北区堂島
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 図書印刷
製本 大口製本

靴の中から出てきた話 目次

夢

7

たばこのやめ方、教えますぞ

12

うまく五十歳になる法

20

税金をよろこんで払おう

25

ストレスから解放される法

36

ハダカのすすめ

43

夕日で見えてくる

53

なにになるのもむずかしい

60

霊になった気分

71

おそろしきイタリヤ熱

77

パリ、しみじみ、負け惜しみ

88

たかがクシャミというなかれ

94

記憶力と感応力

105

世の中、どこかくるってる？

111

たばこのすいがらケンカのもと

127

イコあるいはネス

145

とんだ夢と、とんでる夢

152

万葉語で驚いていた	163
人生、五時すぎ、五十すぎ	170
見る目がなければ……	179
アンケートなんてくそくらえ	187
コンプレックス	195
口うるさは……	203
人生、ドラマと考えれば	212
ポケット	222
人間五十、決意の年	229
あえて説教くさくならんと決意すれど……	235

装幀とカット

阿部隆夫

鞆の中から出てきた話

ある日、夢の中で、ぼくは大きなカバンになっていた。夢の中ならざらにあることだ。ぼくは犬になつたこともあれば、犬にたかつたノミになつたことだつてある。そうだ、こんなことだつてあるんだ。ぼくはレコードプレイヤーの針になり、レコードの溝をくすぐる役をやらされた。すると、誰のレコードだつたか忘れたが、やつこさん、くすぐつたがつてグハグハグハハと変な下品な声を出して笑つたもんだ。もちろん、夢はそこでさめた。はて、なにを書こうとしていたのだろう。はじめからこんなでは、先が思いやられるぞ。

そうだ。ぼくが夢の中でカバンになつた話をしていたのだつた。大きな布製の、縁と角だけは革で補強され、内側にも外側にも、数えきれないほどのポケットのついた、ポケットだらけのカバン。

夢というのは便利だ。どこにも売っていないけれど「世の中にこんなものが一つあつてもいいのにな」と思っていると、それをサッと作りあげてしまう。しかし、カバンにされたのは、ぼくにとって

は、あまり便利なこととはいえない。そういうカバンをただでもらって、使う人間になる方がずっと便利だ。しかし、夢はそこまでぼくのことを考えてくれない。

さて、ぼくはそこで考えた。夢の中で考えたのだ。大した思索家だ。自分で感心しているんだから世話はない。

「いったいぜんたい、おれは、なんでカバンなんかになってしまったのか」

理由はすぐに見つかった。ぼくはカバンが好きだ。好きも好き大好きで、子供の頃から好きだったが、今でも好きだ。デパートに行くと、いつも一時間ほど、紙くずでふくらまされたカバンの並ぶ売場を、うろうろ、うろつかずにいられない。そして、うちのかみさんが、ほっておけば誘惑に負けそうになるぼくの耳に、

「あんた、またカバン？ そんなにカバンばかり買ってどうするのよ。カバンを置く場所がなくなっちゃうじゃないの」

と、いらだたしげな声でささやかなければ、ぼくは毎回のようにカバンを買ってしまうのではないかと思う。

ま、それほどのカバン好きのぼくが、ついにカバンそのものになった夢を見たって、ちっとも驚くことはないのだ。ただ、夢がすなおなら、ぼくに、小ささまさま、色さまさま、形さまさまの、革製布製プラスチック製の幾千のカバンを、次々に買う夢を見せてくれるんだが、フロイト先生が指摘なさったように、夢にはかなりひねくれたところがあって、それで、ぼくを布製の大きなカバンにして

しまったというわけだ。

しかし、それはぼくが見つけた理由。フロイト先生に話したら、そんなのは理由ではない、もっと別なことが、お前がカバンになった理由だといった。むろん、これもまだ夢の中のことなのである。

まったく夢というのは便利だ。フロイトから個人授業を受けることさえ可能なのだ。夢の中で東大に入学し、勉強し、卒業させてもらえれば、入試競争も大分楽になるだろう。これは余計だ。

さて夢の中のフロイトはケチで、けっこう高い授業料を要求した。ぼくが、

「高いすね」

といったら、

「夢の中だ。いくら高かったって、お前の損にならん」

と答えた。諸君、まちがえてはならない。まだ、これから先も、ずーっと夢の中の話だ。

フロイト先生は、ぼくの差しだした授業料を内ポケットにしまいこむと、

「お前さん、便秘がちではないかな」

といった。ぼくは目をまるくして図星だと答えた。そのとおりだったからだ。

「それは、あんたが、どケチで、無意識的にためこむのが好きで、出すのはウンコを出すのも嫌いであるからだ」

フロイト先生は続け、ぼくは、それはちがうと首をふった。

「いや、ちがいはしない。それゆえカバンになるような夢も見る。お前は、五円玉は五円玉、十円は十円、千円は千円、そんなふうに整理して、カバンのそれぞれのポケットの中につめこんでおきたいのだ。日本のお金ばかりでなく、ドルもフランもマルクもポンドも……」

それは、どうも本当らしい、とぼくは答えた。実際、ぼくが化けているカバンのポケットには、すではちきれんばかりのお金がつまっていたからだ。ぼくは、どうも旅行に出かけようとしていたらしい。つまりぼくをぶらさげて出発する人を待っていた。もちろん、その人が旅費を払う。こうしてぼくはただで旅行する。

ま、変な夢だ。しかし、そのあとが、もっと変だった。ぼくはフロイト先生と、少しばかり争ったのだ。ぼくがためこむばかりで、出すのが嫌いだというのは先生の誤解で、むしろ、一度にドバーッと出す快感を味わうためにためているだけだ、とぼくはフロイト先生にいった。ぼくたちは、便秘の話をしていたのである。すると、先生は急に不機嫌になって、下品な口調で、

「この、クソブクロめ」

と叫んで、手品師みたいな手つきをすると、ぼく、つまりカバンのポケットにあった、銀貨銅貨、それからお札の束は、みんな一瞬にしてクソとなってしまったのだ。

ぼくは悲しくなって、うめいた。涙が目からあふれだした。ぼく、というよりそのカバンにはちゃんと目もついていたのである。ただ、その目から流れだした涙は、目の下の二つのポケットの中に流れこみ、そこにたまりはじめた。

ぼくはそこで、なにやら恐怖感におそわれて目をさました。自分が目の下に、大きな涙のたまりそうなるんだ皮膚の袋をぶらさげた老人になってしまったような気がした。それが、とてつもなく恐ろしい感情を呼びさましたのである。

ま、奇妙な夢を見たものだ。だが、夢は、しょせん夢。あまりリアルで奇妙でない夢だと、これまで、さめたあとで気味がわるい。ともかく、その夢からさめた後、ぼくは、もう一度、カバンになっていた自分のことを思い浮べた。ここにはドルが、ここにはフラン、ここには円があったつけ、と考えた。ちょっと惜しい気がした。しかし、夢のお金がさめた後も残っていたらと考えるのは、われながら、あまりに欲深すぎ、現実的すぎる。あまりにも、夢を夢のない話に変えてしまいすぎる。

そこで、ぼくは、あの無数のポケットに、あれやこれやのお話のたね、エッセイ、小説のたねをしまっておくことを考えはじめた。胸のポケットのチャックをあけて熱烈な恋のお話を出すなんてのは、ちょっと少女趣味すぎるにしても、編集者から注文を受け、締切りが迫ってさいそくされたら、

「はて、どのポケットのを出すか」

と、ポケットをさぐればいいのだから、これは便利だ。もはや、うんうんと苦しまないでもいい。そう考えたら、ポケットにお話のつまったカバンの夢の方が、お金のつまった夢より、ずっと夢らしく思われたのであった。

たばこのやめ方、教えますぞ

変な夢の話をしたが、こんな夢をよく見るようになったのは、この夏から、ぼくがブツリとたばこをやめたことに原因があるらしい。それ以前は、もう少しまともな、つまり排泄物だとかお金だとかの出てこない夢を、見ていた。

ともかく、そういうわけで、現在、ぼくは禁煙中だ。それもかなり続きそうである。この原稿を書いている時点で、そろそろ満三カ月禁煙に成功していることになる。

諸君はどう考えるか知らぬが、どうやら世の中では、禁煙とはむずかしいことのひとつと思われているようだ。ぼくも、自分でやってみて、どうやらなんてものでなく、非常にむずかしいものだということ、実感した。つまり、ぼくは、その大いなる困難を克服した、なかなか見どころのある人間なのである。どうしたって、論理的にはそういうことになる。

ところが、ぼくが知人たちに、現在禁煙し、それを実行中であるといっても、

「そうか。お前が、あんなにむずかしいといわれている禁煙に挑戦し、それに成功したんか。お前はなかなかの人物だったのだな。見なおしたぜ」

そういつてくれるものがない。その逆に、

「なに、お前が禁煙した。禁煙って、とてもむずかしいって聞いてたが、お前にもできるとなると、それほどのことでもないんだな」

と、はいてすてるほども多い人間がそういうのである。いや、こんなふとどきな礼儀知らずどもは、さして多くなくとも、はいてすてちまいたいところだ。

だが、ぼくは、そこで考えたのである。そもそも、人間には二種類あるのだと。いや、少なくとも二種類はあるというべきだろうか。実際にはもっと沢山の種類があつたてさし支えない。ともかく、こういう二種類の人間がいる。その一つは、本当はつまらん努力しかなかったのに、運がいいばかりに、大変なことをやりとげたかのように尊敬されてしまう人間だ。もう一つは、とてもとてもむずかしいことをやってのけても、日頃だめなやつと思われているので、あいつのできるのなら大したことではない、と思われてしまう人間だ。そのため尊敬を受けることがない。ま、ぼくはこのあとの種類の人間ということになる。

ところで諸君、諸君はどう思う？　いったい、どちらの人間の方が世に益するところが多い？

はじめの方の人間は、大変に尊敬される。あの人はえらい。えらいからこんなことができる。すなわちこんなことは、あの人でなければできない。そう思われる。誰にもできることをやったって、尊敬されやしない。つまり、尊敬される人間は、他の人々に、同じことをやろうという気を起させない。

いわば、孤立した善行者だ。

ところが、後者はどうだろう。なにをやっても尊敬はえられないが、他の人間を、あいつだってやれたんだから、おれたちにもきつとできるさ、という気にさせる。こうしてやる気を起させる。

他人にやる気をなくさせて尊敬を受けるのと、尊敬など受けないが、多くの人にやる気を起させる人間と、どちらが世に益するか。こんなことは、考えなくともわかるだろう。しかし、世の中には、恩知らずが多い。事の本質を見ぬく視力を持たぬものが多い。自分たちにとってもっとも有益な人間を、それとは知らず、軽べつのこもった目付きで見つめ、自分たちには縁のない役立たずの人間を、尊敬のまなざしで見つめる。

どうもグチっぽくなった。

まあいい。事實は事實、動かしがたいことなのだから。それよりもどうだろう、君も禁煙してみないか。そう、ぼくができるくらいだから、禁煙なんてとてもやさしい。そう、そんなにむずかしくない。誰だってできる。だからやろうではないか。ぼくのまねをすればいいんだ。

さあ、準備はよろしいかな。では、まず、四十度の熱を出すこと。しかも、できるなら、夏のさなかがいい。ぼくが熱を出したのは、七月末の猛暑のさなかだった。そして、がたがたぶるぶる、悪感戦慄と呼ぶのだが、あの全身をふるわすふるえ方で、ふとんを四枚も重ねて、その下でふるえていた。